

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00370

研究課題名（和文）晋宋期における地方官吏の文学空間 山水と神怪の探求

研究課題名（英文）Literary Spaces of Provincial Government Officials in the Jin-Song Period: The Pursuit of Mountains and Water, the Divine and the Mysterious

研究代表者

大平 幸代（OHIRA, Sachiyo）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：90351725

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、晋宋期における地方官吏の著述活動について考察したものである。この時期には、地方の風俗や伝説を記録した地方志が多数編纂された。地方の官吏は、当地の孝子孝女が起こした奇跡や、山中の神秘的な事象を記録した。本研究では、豫章、会稽、彭城の三地点について、神秘的な伝説や著名人の逸話が、どのような意味を持ち、どのように記録されたのかを分析した。また、各地の伝説が小説集に収録された際に、どのように変化したのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地方志や従軍記、正史や別伝等の諸記録を参照しながら、説話（軼事小説、志怪小説）を読みなおし、晋宋期における地域社会のありようや武人集団の信仰・文芸活動の一端を明らかにした。本研究は、『世説新語』や「桃花源記」といった中国古典小説作品に新たな解釈の可能性を示すとともに、説話や詩賦の整理分析による中国中古社会文化史研究の有効性を示すものでもある。研究成果は、中国と台湾の国際学会で発表し、国内外の学術雑誌に掲載された。

研究成果の概要（英文）：This study examines the literary activities of provincial government officials in the Jin-Song period. This period witnessed the compilation of numerous local chronicles on provincial customs and legends. Provincial government officials recorded the wonders performed by local filial sons and daughters, as well as the mysterious phenomena of the mountains. This study analyzes the meaning of the mysterious legends and anecdotes about prominent figures and how they were recorded, focusing on the three sites of Yuzhang, Kuaiji, and Pengcheng. It clarifies how various local legends changed as they were included in collections of novels.

研究分野：中国文学

キーワード：地方志 世説新語 志怪 山水

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「地方官吏の文学空間」に着目して、晋宋期の文学のありようを明らかにしようとするものである。地方の官衙は、詩文創作、書物編纂あるいは説話伝承の場であった。地方に赴任した刺史や太守、その属僚と地元の官吏・古老・隠士が交流することによって、新たな作品や記録が生まれた。その文学生成の場をとらえてみたいのである。

もちろん、これには困難がともなう。魏晋南北朝文学には、そもそも、不明な点が多い。現存する資料が少ないため、文献がどのような場でどのような人によってどのような意図をもって記されてきたのか、実態を解明することが難しいのである。

また、『文選』や『世説新語』等の少数の例外を除き、編纂当時の内容をほぼ保つ書物は限られ、断片をつなぎあわせて全容を想像するしかない。今に伝わる正史ですら、後世の編纂によるものであり、虚実の区別がつきにくい。つまり、魏晋南北朝文学の研究には、伝世の文献の性質を一つ一つ見極めつつ、慎重に資料を取り扱ってゆく必要がある。

よって、本研究では、小さな「場」に区切り、歴史書や地理書等の文献の記述を丹念につなぎあわせて、「場」の復元を図ることとする。

なお、本研究では、歴史・地理関連の文献や先行研究を広く利用するが、特に重視するのは、地方官僚の語りや著述の場を反映した地方志である。「地方」に焦点をあてるのは、次の三つの理由による。第一に、地方志の編纂が急激に増加し、地域意識の高まった時代であったため。第二に、各地に文化の拠点ができただけでなく、廬山(慧遠とその周辺)など少数の例外を除き、いまだ詳細な考察がなされていないためである。また第三に、地方官吏に注目することにより、実態のつかみにくい中下級士人の文学活動の一端を明らかにしたいと考えるがゆえである。

2. 研究の目的

本研究課題で明らかにしようとしたのは、大きく言えば、文学創作の背後にある社会状況、および詩文を作り書物を編む人々の心性である。著述の場の状況は、個別の著名な詩人やその作品からだけでは、読み取りがたい。だが、一定の「場」に関わる人々や関連文献を総合的に見ることによって、その時その場で文章を記し、書物を編纂することの意味を、わずかながらもくみ取ることができるであろう。

本研究で主に注目する「場」は、地方の官衙や当地の定住者、あるいはともに移動する集団の語りの場である。特定の地域あるいは集団が、どのような性質をもつのか、その性質がどのように作り上げられていったのか、またその地域あるいは集団が外部と接触・交流することによって、相互にどのような影響をもたらしたのか。こうした問いについて具体的な考証を進めることにより、動態的な文学地図を描出したいのである。

なお、本研究を進めるにあたり、次の二項の接点に着目して具体的な考察対象(事象)を定める。一つは地方志・地理書に記される山水、もう一つは神怪である。晋宋期に多くの地理書が編纂されたことは、つとに指摘されるところだが、書物のほとんどが散佚しており、編纂者もさほど著名な文人ではないため、これまで詳細な検討がなされていない。だが、彼らが文学作品の創作者としてあるいは受容者として果たした役割は小さくない。また、地理書の編者の多くは、地方官吏であった。地方官吏は、地域の祭祀を行い、山水を探索し、怪異を記録する存在でもあった。また彼らは、古老から地域の伝承を聞き、樵や漁師から神怪のうわさを耳にする。さらには、隠者や僧侶・道士とのつながりも持つ。彼らが見聞し、伝え、記したその「場」を想定し、可能な限り再現することによって、「神怪」を記すことの意味が見えてくるだろう。また、当時流行した山水詩文の文字テキストの基盤となった共通認識のありようを明らかにできれば、より重層的なテキスト読解が可能となるだろう。

3. 研究の方法

本研究は、次の二方面から考察を進めた。

(1) 地方志・地理書等を利用した地域文人の著述活動の解明

地方志は、当地の名士・隠士のほか、外から赴任してきた太守やその属僚によって記されることが多い。地方志の記述から、どのような立場の編纂者が何をどのようにアピールしようとしていたのかを明らかにする。ただし、地方志は、断片しか伝わっておらず、類似する佚文でも引用する書物によって異同がある。よって、佚文を丁寧に比較検討し、書物の性質に配慮しながら、利用する必要がある。

重点的に注目したのは、荆楚地域(荊州・湘州・江州) 呉(主に会稽)におけるコミュニティの形成とその継承のされ方である。の荆楚地域は、政治的・軍事的に重要な地域であったため、旧来の豪族のほか、中央の政権を左右するほどの力をもった人物が当地に赴任することとなる。そこには、おのずと詩文に秀で高い学識をもった人材が集まる。は旧来の土豪が力をもつ地で、古くからの文化や伝説が継承されている。さらに、東晋以降、風流人士の隠棲の地ともなったため、新たな潮流を反映した説話の変容が起こりやすい。

(2) 歴史記述、地理環境からみた説話および学術・詩文創作の背景の検討

宋齊期には、武人や寒門寒人が抬頭し、歴史書編纂や詩文創作の場でも活躍しはじめる。その社会階層の変動と著述活動のかかわりを、歴史的地理的状況を可能なかぎり詳細に考察することによって、明らかにする。例えば、東晋末の劉裕の北伐とそれに関わる従軍遊記や詩文創作については、拙論「劉裕の北伐をめぐる文学——晋末革命を演出した人とことば」(『古代学』9、2017年)に論じたが、北伐のその後の展開について、彭城を中心とする江北の武人の活動に注目し、彼らが歴史書のなかでどのように記され、説話の中でいかに語られてゆくのか、両者の人物造形にいかなる差異があるのかを検討する。

また、劉宋以降、文武両面の活動が重んじられ、狩猟や軍旅の場でも文人が活躍するが、その際、旧来の高門貴族にかわり台頭してくるのが寒門寒人である。実際の詩文創作の場で、文人たちがどのような立場にあり、どのような新たなスタイルの詩文を作り出していったのかを明らかにする。

4. 研究成果

次の四点に関する論考を執筆し、学会発表論文あるいは学術雑誌論文として公刊した。

(1) 地域社会における説話の形成と変容の過程

地方官僚組織および地域の名士によって語られ、記された物語に注目し、豫章と会稽について、それぞれ次の論文としてまとめた。

「「豫章太守陳蕃」的德行——《世説新語》与地方官吏文化」(原文、中国語)

後漢の陳蕃が豫章太守となった際、地元の隠士である徐孺子を礼遇した話は、歴史書や『世説新語』に記され、後世の詩文の題材ともなって広く知られる。本論は、この逸話について、「豫章」という土地のイメージ、「太守」と「処士」との関係に注目して考察し、「陳蕃礼賢」の話が『世説新語』の冒頭に置かれたことの意義について論じたものである。豫章は、後漢においては南方の辺境の地ではなかったが、南朝の晋宋期には徐孺子の遺風のつたわる隠遁を重んじる土地だと評価されるようになる。これには、歴代の太守が徐孺子の祭祀を行ってきた豫章の伝統と、その郷土史を編んだ劉宋期の豫章の処士・雷次宗の存在が大きく影響している。陳蕃については豫章太守就任を予言する怪異譚も伝わっており、豫章で地元ゆかりの名士として様々に語られていた様子が見ええる。『世説新語』は、こうした状況を背景として、当時の人々が好んだ軽妙洒脱に受け答えをする風流人的な要素を付け加え、理想的な太守の姿として陳蕃を描いたのである。

「「曹娥碑」を語る人々——後漢から晋宋期における地方社会と説話」

曹娥は会稽の孝女として知られる。溺死した父の亡骸を探すために身を投げ、死後、その孝を称える碑が地元の県令・度尚によって立てられた。本稿では、「曹娥碑」をめぐる伝承の変容のあとをたどり、会稽における地域意識の高まりの中で曹娥が孝女の代表として称揚されていったさまを示した。度尚はその後、荊州刺史などを歴任し、八厨の一人に数えられる名士になる。豫章の陳蕃と同じく、地元の長官をつとめた著名人なのである。会稽での度尚による曹娥の表彰は、『会稽典録』に記され、さらに袁宏『後漢紀』に記録される。そこには、地域意識の高まりや地方志の整備・伝播といった時代の潮流が見ええる。さらにおもしろいことには、曹娥を含む南方の話は、西晋期に北方に伝わり呉の風俗文化として北人の興味を引いていたらしい。水にまつわる曹娥の話はエキゾチックな南方の物語の一つであったのだ。郷里の賢人として語る会稽の書物と、辺境趣味の一つとして楽しむ北方の伝承(「夏仲御(統)別伝」)では、同じ内容を扱っても性質は大きく異なるのである。そして、その先にある劉宋期の『世説新語』や『異苑』の曹娥碑の話は、曹操、揚脩、さらには禰衡を加えて、また別の楽しみ方を添えることとなった。

(2) 南北の移動・交流と応驗譚

「逃げる武人と闇夜の光——晋末から劉宋前期の北伐と観世音応驗譚」

観世音に祈って助かる話は、日本に所蔵される三種の「観世音応驗記」のほか、劉義慶『宣驗記』、王琰『冥祥記』などにも含まれ、東晋から齊にかけて多くの観世音応驗譚が語られたことが知られる。応驗譚の多くはパターン化されており、大まかな筋書きとしては、どれも大差がない。本稿では、闇夜に灯火に導かれて北から南に逃走する話に焦点をあて、あえて細部にこだわって、応驗譚の歴史的地理的背景を考察した。このパターンの話の逃走状況は大きく二つに分かれる。一つは、北方出身の武人が一族をひきいて南に帰順する際の逃亡劇であり、もう一つは、晋末から劉宋の北伐の際、捕虜になったり戦場から逃亡したりした者が郷里に逃げ帰る話である。実は前者で語られるのも、のちに北伐で活躍する武将であるから、両者とも北伐をめぐる語りの一環ともみなせる。地理的には、彭城が帰還の舞台になるものが多い。これには、彭城が北伐の拠点であり、実際に北伐に徴用されるのも、長江以北淮水兩岸の民が多かったこと、彭城には晩渡北人の建立した仏寺などのあったことが関係している。この南北の中間地帯ともいう地域が、切実に観世音応驗譚の語られる場として存在していたと推測できるのだが、それらの話が書物に記され、南方士人の読む物語となるのは、彭城が失われ、北伐の足掛かりが失われてからのことであった。

(3) 士人階層の変容と文武の言語表現

「六朝の射雉と君臣 雉場をめぐる勸戒のこぼれ」

皇帝や諸王が雉狩りをするための雉場は都建康の近郊に作られた。本稿は、雉狩りが寒門寒人の活躍の場となったさまを示したものである。雉狩りは三国の魏や呉でも皇帝や王族の遊びとして行われたが、史書等には臣下の諫言とそれを聞き入れる名君という構図で記されることが多い。晋をはさんで、劉宋の孝武帝以降、雉狩りはふたたび盛んに行われるようになるが、史書では権力集中を果たした皇帝の負の面を象徴するものとして描かれる。ただ、留意すべきは、雉狩りが、才学によって皇帝に取り立てられた寒門寒人、いわゆる恩倖の臣にとって、自身の学識や文才を発揮する新たな場であったことである。その例として、本稿では、主に潘岳「射雉賦」につけられた徐爰の注、鮑照の楽府「代雉朝飛」をとりあげた。徐爰の注には、北方の風俗についての聞き書きや、典籍に関する学識の高さを示す記述がみられる。鮑照「代雉朝飛」は、潘岳「射雉賦」の表現を用いながら、戍辺の将兵の勇ましさを忠君の姿勢が加えられている。そこには、北伐などによる武人の抬頭と尚武の気風を反映した雉場の文学が成立していたと考えられるのである。

(4) 「異聞」愛好の風潮

「不朽の「異聞」 劉宋士人の見た曹魏」(学会発表論文、原文中国語)

東晋末から宋初にかけておこった異聞をこのむ風潮は、宋の元嘉期に至って、一方では劉義慶の文学集団による逸話集『世説新語』として、一方では裴松之の『三国志』注として結実する。本稿は、劉裕集団の性質と異聞愛好との関係、宋になって歴史記述をになうようになった檀氏や裴氏の学問、劉宋の武人社会にとっての曹魏像について論じた。これらの問題については、さらなる考察を加え、学術論文として公表する予定である。

以上の考察を通じて、特定の地域・集団における語りと記録がどのように累積され、今に伝わる歴史記録(志怪や別伝もふくむ)や小説ができあがってきたのか、その事例を示した。それぞれ個別の事例にすぎないが、いずれも時代の大きな潮流にかかわる興味深い事象である。

なお、当初、本研究期間中には荆楚地域を重点的に考察の対象とする予定であったが、豫章と会稽、彭城(江北)そして都の建康とそれぞれ異なる性質をもつ地域の特徴的な語りを指摘することとなった。当初の計画とはずれたが、かえって地域による差異を際立たせることができたのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大平幸代	4. 巻 50
2. 論文標題 六朝の射雉と君臣 雉場をめぐる勸戒のことば	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 莫砺鋒著，緑川英樹，大平幸代訳	4. 巻 62
2. 論文標題 【翻訳】『莫砺鋒詩話』「悠閑」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 颯風	6. 最初と最後の頁 86-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大平幸代	4. 巻 49
2. 論文標題 逃げる武人と闇夜の光 晋末から劉宋前期の北伐と観世音応驗譚	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 48-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 莫砺鋒著，緑川英樹，大平幸代訳	4. 巻 61
2. 論文標題 【翻訳】『莫砺鋒詩話』「幸福」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 颯風	6. 最初と最後の頁 85-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大平幸代	4. 巻 -
2. 論文標題 “ 豫章太守陳蕃 ” の德行－《世説新語》と地方官吏文化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 魏晉風流と中国文化：第二屆“世説学”國際學術研討會論文集	6. 最初と最後の頁 14-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 莫砺鋒著，緑川英樹・大平幸代 訳	4. 巻 59・60合併号
2. 論文標題 【翻訳】莫砺鋒詩話「友情」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 颯風	6. 最初と最後の頁 185 - 199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大平幸代	4. 巻 47
2. 論文標題 「曹娥碑」を語る人々 後漢から晋宋期における地方社会と説話	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 288 - 310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 莫砺鋒著，緑川英樹・大平幸代訳	4. 巻 58
2. 論文標題 【翻訳】莫砺鋒詩話「愛情」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 颯風	6. 最初と最後の頁 133-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 大平幸代
2. 発表標題 不朽之「異聞」：劉宋士人眼中的曹魏
3. 学会等名 劉宋關鍵詞國際學術研討會（台湾・中央研究院文哲研究所）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大平幸代
2. 発表標題 “豫章太守陳蕃”の徳行 《世説新語》与地方官吏文化
3. 学会等名 魏晋風流与中国文化：第二屆《世説》学国際學術研討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------